

の農水副部長、党の最高機関の総務に就任、衆議院では決算委員、議運委の理事、建設委員長、政府にあっては建設政務次官、第一次宮沢内閣では、国務大臣、国土庁長官の重責を果たし、一回り更に大きくなって、その人柄のよさと実行力に富むところ、将来必ずや大を成すことを期待されている。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

北海道の実験開拓団入植より

引揚げまで

北海道 梶田 繁

昭和十七年四月、沢口作一氏が茨城県内原訓練所にて開拓団経営指導その他全般にわたり研修され、十月上旬湧別に帰郷後、第十二次北海道実験開拓団長として満州開拓入植希望者選考に入る。これより先に次男、沢口正雄氏が十七年三月大連三十里堡、大連農事株式

会社に勤めていた。翌十八年三月、父沢口作一氏と打ち合わせて満拓公社指定地へ先遣として大連三十里堡から北安省海倫県葉家堡^{ハルビン}へ入地した。

現地は当時満人警察隊の居所となっていた建物で、これは元馬占山軍部の先遣駐屯地所で萬福林の居城となっていたところでもあった。

ここで満拓公社指示のもとに、家屋の買収と農地の再配分などを協議、農地は主として二耕地のみ。海倫街裡にあった満拓事務所は馬占山軍駐屯地で、宿泊施設のある弁事所は兵舎であった。

先遣隊五戸は本隊招致と将来の経営準備のため営農に入って行った。

営農は共同作業とし馬鈴薯、燕麥、大豆、その他を現地人の応援を願ひ、当座の自給できるだけの畑をと懸命の耕作に入った。

しかしこの年は虫害が発生し収穫はなく、一応は満拓の協力援助を得て越冬した。

沢口団長は本隊招致のため一時帰国し、団員募集を各地に呼びかけ三十戸を募集、(先遣隊を含め)三十

五戸、医師及び学校長各一戸の態勢が整って、小樽に集合したのは十九年三月二十二日、羅津を經由して満州へ着いたのが四月三日、北海道人にとってはあこがれの新天地であり、希望の大地であった。満州国北安省海倫県葉家堡屯落^{シヤウ}は時ならぬ混雑をきわめた。

十九年春の蒔き付けは馬の輸送が遅れたため、馬なしの耕作にかかったのが五月、あの広い大地に一畝一畝、丹念に蒔いて行く苦労は大変なものであった。

六月には馬と後続団体が到着し、心強く張り切った。第一回目の収穫は楽しいもので、みんなの顔も明るかった。

かくして将来へのめどもたち、神社の建築のため山へ川へと木石採取に励み、二十年の春を迎え、入植記念日や本殿の敷地の決定、街の型、学校の位置、町村移行に伴う建物の構想など検討するまでに至った。

又、牛乳の処理、種牛の管理など、皆多忙な毎日であった。やがて春耕期となり蒔き付けにかかり三百町余りは重荷であったが、全員協力して目的を完遂し、北海道農民としてもまた、実験農場として他団へ気を

吐いたものでした。

しかし、平静なるべき開拓地にも、日本本土の戦況は日増しに悪化、団員にも次々と召集令状がきて二十数人に及んだ。

このような状況下では大小動物の世話を始め畑の管理に追われ寸暇とてなく、現住民を雇うも思うようにならず、麦の刈取り期に入って八月十五日の終戦となった。

このころ団幹部も最後の召集でハルビンに応召したが受け入れる部隊もなく、やむなく引き返した。それより海倫満拓、県公署と連絡、近隣開拓団家族の処置などの打ち合わせ離団集会の状況判断に数日間、その間にもいろいろの事件が発生し、ついに八月二十四日各開拓団に対し、実験開拓団本部に集合することを指示した。

集まった団は広根団、備後団、萬順団の三義勇隊開拓団、朝から雨上りの悪路の中、馬車にて集結、このうち、萬順開拓団家族は二十一日からの暴民の襲撃で疲労が目立っていたが、実験開拓団と共に全団が葉家

堡屯を後に八里の海倫街へ出発した。

同夜は福海村役場構内で一泊、次の日海倫種馬場に收容計画をたてていたがソ連兵の占領のため、予定を変更して海倫農学校へ向かったが連日の雨のあとで馬の足は思うにまかせず、泥水の中を人馬共につかれ果て王学孟屯に着いたのが夕刻であった。

現住民と屯長の情けで、人馬ともに一夜を明かすこととなったが、夜半より又雨となり、低地は湖水と化し、わずかに部落が高台のため雨水からのがれて孤立し、この王学孟屯で一週間を過ごすこととなった。

この間、各団、幹部は団備え付けの武器返納のため海倫県公署へ出向、ソ連軍の手ひどい取り調べにあり、生死の苦をなめていた。

かくするうちに、土民の蜂起による略奪などが起こり、身の危険を感じ、隣地の国立種馬場のソ連軍にやむなく救出を求め、やっとの思いで海倫農学校へ收容されるに至った。

離団後一週間、この間雨期となり、晴れ間は出発前後三日くらいか、降りだしたら一日中止むときとてな

く、高台を除いて平地は一面湖水と化し、その雨のためずぶ濡れとなり、女、子供、老人、身重な者は行動するにもやっとならなかつた。

かくして海倫農学校に收容されたのは、先に記した団の者の外、備南、北鎮、農学校の職員家族七団体、七百四十人くらいの集団難民生活が始まったのである。

一日二杯のコーリヤンの粥、全員栄養失調となり、子供たちの姿を見るに忍びず、しかれども我々はまだまだな方で農学校の圃場で幾分でも自給できたからであつた。

かくしているうち、ソ連軍の命令で、実験開拓団と萬順義勇開拓団、二団体が九月二十九日海倫駅よりハルビンに向かい、三十日ハルビン着、桃山小学校に泊したが、ハルビンは難民の收容能力も限界であつたため再度乗車し新京に向かった。

この間に団員の帰郷した応召者三人に遭遇同行して大変助かった。十月三日新京到着、收容所たる新京東大房身陸軍官舎イゴクシに收容されたが、この避難のうち、出生二、死亡者は中嶋氏の幼児死亡するも埋蔵できず背

負ったまま新京に着いた。

さて収容所といつてもこわれたれんがの家、傷んだ家具や雨戸をひろい集めて、雨露をしのぐだけの荒された建物、やっと煮炊きの煙を出したのは早くて三日、遅い者は五日もかかった。女世帯の多い、まして栄養不良、菜も無く、医師はおれど手当ての方法とてなく、現地人の家に雇われ食べものをもらって食べるなど日本人の耐え得るだけの食糧配給は難民協会の数字の上だけで、現物は三分の一にも満たないほどであった。

沢口団長は難民協会に出向き、今後の難民の食糧の折衝、又団幹部は現住民に交渉して労力を提供して、毎日いくばくかの収入を得ては団家族の食糧を買い求めての生活であった。

そのころ、ソ連軍の命令により大連三十里堡の元日本果樹酪農水田地帯へ入植のことが決定に至った経過を団員に知らされたのは年末のことであった。

この前後より悪性のハシカ、ジフテリア、発疹チフスなどが発生、幼児子供の死亡三十人近くとなり、まったく言語に絶する状況となり、入植の話はのびの

びとなっていた。

こうした状況の三月、団長が病に倒れ、三月十三日ついに不帰の人となった。このため再入植の話は立ち消えとなり、加えてソ連軍の撤収、入れ替りに国民政府軍管理となった。

又、共産軍（八路といった）と国府軍との内戦が始まり新京においても三日くらい市街戦となり、その犠牲となった者数知れず、管理状況も徹底せず、まぢまぢとなり全く無政府状態となった。

やがて市街戦も落ち着いた二十一年七月ころより日本人難民の日本送還の交渉が実り、七月十二日、日僑第二転送団として、南新京駅に集合した者約二千余人、同日南新京を出発、錦県はコレラ発生のためコロ島へ直行、引揚船の入港を待ち、コロ島よりアメリカ貨貨の引揚船に乗船、佐世保港に入港したのが七月二十七日、税関手続き及びコレラの検査などで三日を要したが八月三日北海道の郷里、湧別原野に着いたのであった。

遺骨三十五柱、団員とその家族合わせて百余人、沢

口団長の遺骨を抱いての引揚げが終わった。以上概略を記述したが、その惨状の一部分を次に追記して、後世に伝える事とする。

開拓団にも召集令状

昭和二十年五月に入って、蒔き付けは順調に進み休まない農作業もはっとひと息つく、陽気となった。郷里からの便りは戦況は日増しに激しさを伝え、現地開拓団では空襲もなく、戦争の激しさも感じないありさまであった。

六月十七日突然、高橋誠意君に召集令状が来た。団で初の召集、機密を守るためとて本部での見送りだけで出征した。

七月下旬副団長の沢口君始め十人ほどの応召で、この家も家畜の世話、農地の管理で労力不足ははっきりしていた。もう男手は数えるほどしかいなくなった。残っている男はお互いに身の回りや、団務の仕事を整理して心の準備をしていた。雨期に入って農作物は目に見えて伸び、唐黍も粟も人の丈ほどになった。麻の畑の見事さ、馬糧の燕麦も北海道と異なった伸びを

見せ、裸麦も小麦も黄熟期に入っていた。戦争さえなければ秋の収穫が楽しみであった。

そのうち県の畜産課より家畜品評会の通知があり馬好きな岡村の父さんをお願いして八月八日出場の予定馬を見て回り準備を進めた。

もうこの天気を見計らって麦刈りに入った人もありました。この家畜品評会が在満開拓団の最後になろうとは、だれも思いも及ばなかった。

海倫の競馬場へ馬を連ねて出かけたのは八月八日好天に恵まれ途中現地の方たちも自慢の愛馬をつれて三五五と丘を越え、クリークを渡り陽の沈むころ、海倫郊外競馬場の厩舎に到着した。

言葉は通じなくても、お互いに馬を愛する気持ちは通じます。馬の話、粟の出来具合、麻の伸び自慢、翌九日は昨日にも増して好天、競馬場を埋める観衆、県の畜産課長はじめ、開拓団の幹部、各部落の長、部落の人たち、日本人、現地人の差別なく喜喜として一日を楽しく、くつろいでいた。

八月九日忍びよる戦いの影、ソ連軍参戦越境も知ら

ず、一生の内が一番思い出される良い日であった。皆
喜喜として馬を連ねて帰途についた。

その日、団の幹部に県庁から帰団を延ばすようにと
の指示があり弁事所で一泊、松田君が馬車を一台残し
て待っていてくれた。夜来豪雨となり降りに降った。

八月十日も一日中降り続いた。時局の推移を聞かされ
たが、まだソ連の参戦は知らされずにいた。しかし最
悪の事態を思わずにはいらなかった。

ハルビンから再三再四電話が入り、あちらも雨で列
車も不通とのこと、各開拓団幹部は電話で連絡、県庁
で待機した。

満州軍も、海倫駐屯の通信隊も、何事も連絡はなく、
朝鮮系の人は、ソ連軍の参戦の情報を伝えていると配
給所の内山さんが知らせてくれた。県公署も、満拓も
軍事に関しては全く関知できず、県公安室でもハルビ
ンよりの情報よりなく、多数の開拓民を抱える県開拓
課、満拓ともに今後の行動を判断しかねていた。

八月十日に待機をいわれた団幹部は、連日の雨で十
一、十二日と気をもみながら十三日午後やっとなり

車がつき、二千数百人の召集令状が各団に渡され愕然
としたが、やっとなり連絡した。

令状は十日発令したもので、十一日ハルビン集結と
あったが雨のため列車不通で令状が遅れた。公安室特
務課よりハルビン衛戍司令にその状況を報告され海倫
地区は十四日正午出発となった。

各団とも令状を受け取り夜の道を急ぎ帰途についた。
闇の中の雨、真っ暗な中を平安堡の入口の橋は増水の
ため渡れず、馬腹の深さもある近くの畑を松田君が泳
ぎながら馬を引いて渡った。畑は湖水と化していた。

実験開拓団に着いたのは夜明けの三時ごろで人馬と
もずぶ濡れ、萬順、広根、備後各団に電話連絡、実験
本部で令状を渡すこととして出向を待った。

当団では沢口団長を囲んで残っている者に申し送り
をした。眠る間もなく夜が明けてやっとなり長い雨が止ん
だ。八里もある萬順から雨の中を夜通し歩いて八時ご
ろ、もう到着した人もいる。九時人員点呼をして令状
を渡し、乗馬して海倫駅まで駆け通した。

泥沼のような雨後の道、人馬ともに泥まみれとなり

人も馬も疲れ切ってやっと駅に着いた。

副県長の佐久間さん、小野寺警佐ともに先着して待っておられた。北安からの南下の列車は雨のため海北鎮以北で立往生とのこと。

やむなく駅構内で夜を明かすこととなり、日本人街の人たちの炊き出しで夜明けを待った。

雨後のさわやかな夏空、八月十五日午前八時ころか、やっと列車が着いて、二千五百人ほどの応召兵が、無蓋車に乗せられて発車、広い野原を突っ走っていった。そのころ朝鮮系の応召兵の中から戦争の集結がささやかれ出した。

どうあれハルビンまではと、三果樹駅で下車、ハルビン駅に行ったが市内は群衆と軍の移動で身動きのとれぬありさま、結局は受け入れられる部隊もなく召集令状を焼却した。どこからの指示だったのか、乾パンが支給され、皆に配給、今後の行動を協議した結果、開拓団の者は団に戻ることに決まり、先ほどの列車に乗り込んだが機関手が不在でも幸い海倫から召集された満鉄の人が運転して、指示もない列車が線路の危険もか

えりみず、ポイントの切替えを行いながら北へ向かった。

闇夜の中を、どうにか朝になった。松花江方面から軍の移動があるとか、関東軍は南下してしまいこの辺には軍隊はいないとか、いろいろな流言が伝わった。幸いであったことは雨のためか、海北鎮以南に列車の南下がなかったことであつた。

途中クリクの水を給水のため停車した辺りで銃弾に倒れた現地人の遺体があつた。この辺はソ連軍が通つたことを物語っていた。

八月十七日昼下がり、雨後の線路で列車は立往生、現地人の好意で泰家の駅まで丸太のいかだで渡してもらい、ここでまた、乗り捨てられた列車を編成して夜道を一路、海倫に向かった。途中の駅で海倫の状況を知らされ、一同不安にかられながらも運行を続けた。その不安とは、海倫の満州国軍の兵士たちが、この列車で日本軍が武装解除にやって来ると誤解していたことが後でわかつた。

夜の九時か十時ころだったか海倫に着いた。そのこ

ろ、黒河、北安の人たちは南下避難の途中で雨のために
通北で足止め、ソ連軍の暴行を予想して、その前に
死を選んだ団も出たことを知る由もなかった。

開拓団の離団

晴天に戻った朝、野良で朝早くから草取りに余念の
なかった人影が一人も見えない。鳴いている雉の声と
放し飼いの豚の群れだけ、敗戦の重苦しい緊張感のな
か集まった皆に、召集以来今日までのことをお話しす
ると共に、今後のことについて団長と協議を重ね、今
後の処置を県庁の指示を仰ぐ意見でだれか希望者を
募ったが、今となつては仲々引受ける者もない。

結局大場さんと私、梶田が行くこととなった。体の
休むひまもなく今朝来た道を乗馬で海倫へ、日はもう
大分西に傾いていた。日が暮れた海倫街は電灯もまば
らで灯火管制が続いていた中を県長宅へ伺った。団長
をはじめ皆の意見を伝え、今後の開拓団の取るべき手
段を伺った。

事態は急変しており、団を指示する立場にある満拓
はソ連軍に接収され、県も今はどうするすべもなく、

県長も明日はソ連軍の軍事法廷に立たねばならない身
であるという。

佐久間副県長宅は奥さんと子供二人、寝たきりの病
人ということを知っていた私は、もう申し上げる言葉
を失ってしまったが、各開拓団がばらばらでは統一が
とれぬからと国立種馬場に集結することになり、県の
方からそのことを連絡をつけておいてやろうというこ
とになった。もう八時から九時ころか、まあ治安も悪
いから泊めたいが緊急のことゆえ、気を付けて帰って
下さい、私たちが団の人たちが待っているからと帰途
についた。月夜の中、繫いだ馬もしっとり夜露にぬれ
ていた。

街を出て約一里、平安堡（部落）の坂にかかったこ
ろでした。目の先にバツと赤い光が走ったかと思うと、
耳をつんざく銃声ピューと音、とたんに部落の明りが
いっせいに消えて、何の目標もなく、暗い道の真
ん中においてきぼりのようなありさま、道の側溝のく
ぼみに馬を引き入れた一瞬の出来事であった。

馬二頭、人二人この闇の中で、体中を耳にして警戒

しながら夜の白むまで蚊との戦いであった。

やがて物の判別ができるのを待って体を馬に張りつけるようにしてその場を駆け抜け、福海村に着いた時はホッとした。部落長宅に寄り状況を報告し朝食をいただし、休む間もなくまた馬を急がせて団に着いたのは十九日の正午ころであったか。待っていた団長に報告の上、今後のことについて打合せ孫公林ソンコウリンも葉家堡の団員にも連絡をした。

召集されてから六日目ほとんど休む間もなくやっと帰宅したが、在満開拓民の立場、家族の送還などなどこの先、気の遠くなるようなことばかりで寝入ったのは朝であった。

朝食もそこそこに団本部に出かけた時、速馬がすっ飛んできた。何事かと飛び出すと、今その湿地帯で銃器返納に出かけた広根義勇開拓団の者が襲われて銃器を略奪されたらしいという。予想していた最悪の事態が発生した。

近くの団員は家族共ども本部へ集まって、今後のことを協議した。銃器一つなくなった開拓団、暴民と化

した現住民、いつ襲われるかも知れない恐怖感、銃器を持つている義勇隊の若い人の応援を頼むしかない、隣りの広根の義勇隊へ、だれかが使いにいくことになったがまた皆顔を見合わせて引き受ける者はいない。この状況で、今になって無理に命令も、指示することもできない。団長は自分で行くというがそれも一緒に行くという者もない。私の馬は連日海倫往復でつかれきっているため大場さんの馬を支度してもらい私が行くこととなった。

年老いた団長さんの後姿を眺めながら、後から馬を急がせたが、遥かに見える小興安嶺の青い山脈、広野の事務所に届いたのは十二時過ぎであった。

荒野の団でも昨日の件について種種協議を重ねて、だが入植日の浅い我が実験開拓団とは大違いではとするとような安心感が感じられた。食糧事情が悪いので小豆粥ですがと食事を出された。この時の沢口団長は朝からの多忙、勝手なことばかりをいう皆を相手に、恐らく朝食も満足でなかったものと思う。私とて同じこと急に腹がへって幹部の方と食事をとりながら、防

衛対策、引揚げの場合のための義勇隊の力添えをお願いした。

こうしているその時日本馬を飛ばして現地人が到着した、普通は決して日本馬に乗らないのが建前になっているのに、その姿に、お互いに息をのむばかりであった。

転げ込むようにして来た使いの者の手に一片の紙切れ、いま萬順団が匪襲を受け、交戦中とのこと、これは大変なことになった。若い義勇隊が萬順の応援に向かうのと、私たちの婦路の安全を守って付き添って来て萬順方面を気にしながら帰団したがどうやって帰ったか思い出せない。萬順開拓団の中嶋、中野の二人が戦死したことだけは覚えていて。帰団した夜から沢口団長は離団の指示をし二十四日本部に集合を命令した。

軍隊の集合と違い女が小さい子供を抱えて団を捨てての突然の引揚げのための集合である。てんやわんやの大騒ぎであった。本部でも集まった四百人もの食事の準備や今後の食糧の手当て、その運搬方法、自分の

ことは何もできない。

何だかんだと集合に手間どって正午はとうに過ぎたころ全戸がそろった。いずれも自分たちでは最小限と思っていたのだろうが、皆と一緒に逃避行するにはと思うほどのものであった。

出発したのは午後三時ごろであったと思う。昼食もとらず、義勇隊を先頭に現地民から雇った満馬車と自家馬車とで百台以上が雨のあと天気が続いたとはいえず、砂利のない道路、後尾の馬車はまるで水田の中を歩いているようなもの、水田の中は水があるから良いが天気で表面が固まっても、長雨のため底の方は水分が多く、一步一步がどろんどろんと道路で、馬はあえぎあえぎ歩いていた。

今こうして私たちを運搬してくれる現地民の方たちの好意、さして諍いさかいもなく暮らしていた葉家村の方々、心から感謝をしつつも、萬順開拓団の匪襲された例を思いながらの逃避行であった。

義勇隊の人たちは萬順の襲撃を思い、現地人の不信を考慮しながら、事ごとに行動に表し、軽率な行動に

出てしまるのが心配であった。

とうとうその夜は一睡もせず夜も白んできたので状況を判断して小休止して、団で準備してきた食べ物を分配した。

沢口団長は義勇隊の若い二人を連れて国立種馬場の下見に行くように私に申し付けた。村公署の皆さんも終戦後の日本人の処遇については相当気をつかったと思う。馬車の手配にしても現地人の方々の、日本人開拓団に対する感情的なものもあったことを、公的立場にも立って気をつかってくれたことを思わずにはいられません。

こうして軍用道路を海倫へと向かい、平安堡、手前から種馬場に向かったのはもう九時ころでしたか、現住民の満馬はさしてぬかるみを気にせぬのに、私たちの日本馬は、特に身重な馬の歩調が遅れ相当思いもよらぬ苦勞をした。

福海村から王学孟村までこのようにして逃避をしてきたが県公署からの指示として、義勇隊の銃器は一刻も早く返納せねばソ連軍は討伐に向かうとの命令、こ

うしてはおられぬと又出発したのは正午過ぎで銃器返納の馬車を別にして二十人以上も減った。

道路のぬかるみは昨日と同じ、この辺は海倫に近づくにつれて道端に現地人が鉈や鎌などを持って立っています。護身用とは思われるが、女子供たちの多い私たちは、武器一つなく顔見知りの昨日までの地区と違った感情を抱かせます。何かと問題をつくりそうな群れもいて、気にかねぬようにしながら物売りから肝臓のむし焼きを買って味気も水分もないものだが連日の疲れをいやした。

避難の群れも二十台や三十台の馬車ではない。普通満馬は三頭立てで引かせている。日本馬は一頭で引きます。馬の数にしても、馬車にしても五十台以上、先頭から後まで一里(四キロ)はある。ふと先頭の方が騒がしくなった。取り巻いていた現地人が走り出した。連絡用の馬を飛ばし前の人垣を割ってみると先頭の義勇隊が銃を現地人につきつけて、いきり立って騒いでいる。弾を抜くと大声でどなりつけ、不承不承銃から弾を抜いてやっと群衆が収まった。私は馬を走らせ

後続の馬車に次々とどなったり、なだめたりして弾を抜かせた。これでやっといざこざも起こさず海倫街と農道の別れ道に來た。

ここで現地を案内してくれた満州人が、この農道が近道だからという、騙されているのではと心配する人もいたが、この道に入ることが後日幸か不幸か神ならぬ身の知る由もなかったのです。

海倫街に行つたとてこの大勢を收容する場所もなく、食糧とて街の自給すら大変、そのことを知っている私たち幹部は種馬場と農学校の方角に向かった。日暮れに近くなり小休止となりその間に自分の身につけていた軍に関係ある手帳類を日の丸に包み畑の一本の木の根元に埋めた、このころ現地人もいつか姿も消えていた。

現地から、北安方面に出していた、王君が現地人が消えるのを待っていたようにして馬車の陰で自分の満服をぬいで手渡し、北安方面のソ連軍の無法ぶりやら、日本人の食糧難による餓死者を見殺しにしてなお残虐をつくすソ連兵、洪水のため通北辺りです止めされて

いるなど、海倫街近郊に注意すること、街には食糧はないこと、ソ連軍が全部おさえて一般に入手できないことなどを、皆に気兼ねしながら早口に話し終わると葉家村の方へもどって行つた。私の手に黒い満服を残して。

やがて林の丘を回ると小さな部落があった。先ほどこの近道を案内した現地人を介して屯長の王老人、温厚な人柄で、夜になって子供たちがかわいそうだと（物置）を一つ空け渡してくれた。

燃料のない北滿ではポーミの穀、粟穀を遠くから買求めて冬の準備のできるのは相当な資産家でなければできない。そんなコーリヤン穀まで外に出して皆の宿にしてくれた好意に対し頭の下がる思いであった。

我々は外に出したコーリヤンの穀を敷いて星空の下で何日か振りに寝ることができた。静かな夜六百人近い人たちがいるとは思えぬ静けさ、夏とはいえ北滿の夜、冷え冷えとする中を疲れと安心感で思わず寝入ってしまった。

朝の晴れていた空も急変してポツポツ降りから本格

的な土砂降りになり、外にもおられず部室の中へ割り込ませてもらった。

もうこのころは雇った駄車の人たちはこの雨で五十台以上も帰ってしまった。家に着くまでには大変であろうと思った。王老人は昨日の物置小屋以外に、自分たちも奥へ引き込み、働く人の部室一棟を空けるなどして便宜を計って下さいました。

八月二十一日今日も休みなく雨が降り続いて馬も寒そうに外に立っている。王老人の好意で空け渡して使っている部室の大きさは十間の部室一棟、馬小屋一棟、母屋は十間、働く人の部室一棟、炊事の燃料にポーミ穀、こうして書いておかなければ、永久に好意は伝わらないだろうと思う。

雨は一寸の止む間もないまま、一夜明けてもまだ降っている。ここの前の湿地はもう水の流れる先もないのか湖水のように溜っている。ふと気が付くと馬車の心棒と車を止める栓が全部抜かれている。こうなつては馬車は一台も使えない、だれの仕業なのか！

団長は王老人と長い間、話し合っておられたが王老

人が人間愛で日本人避難民を庇護せざるを得ない立場に立った心情、現地人の間に立った苦しい胸の中を察するに余りあるものであります。

八月三十日、雨も小降りとなり時々薄日がさしてきた。この間に義勇隊所管の銃器の返納に海倫に出かけた。屯子内に置いた馬車だけが栓が抜かれずに使用できた。

後日判明したことが海倫に武器返納に出かけた団員が大変な目に遭っていたという。

九月二日午後やっと連絡がきて、残存の古い記録を基に、員数が合わぬと執拗にただされて、少しぐらいの弁明では通ぜず、やっと納得させてきたとのことであつた。この夜、大分更けたころ、土壁から四、五人が家に侵入し物色中を王の人たちに説得されて一応帰つたが、ただ、物欲しさだけであつた。

こうして九月二日の夜は眠れぬまま、お互い息をひそめて夜明けをまつた。翌三日の朝土壁の門の外が騒がしくなった。見ると大勢の人が手に鎌、ホック（鉈）、棍棒などを持ってつめかかっています。この暴民

が門をたたき、土塀を破ろうとする者、外の馬車を運ぶ者、全く手の施しようありません。

もう食事の支度どころではない。生命の危険を守るのにどうするかも考える余地もない。ソ連兵が良いとか悪いとか、何たるかも考えていられない。暴民の略奪、殺傷の犠牲から救われることだけを考え、ソ連兵の駐屯している、種馬場へ伝令を走らせた。

この時暴民側に銃器があったら、萬順団のように悲劇が起きたであろう。その待つもどかしさ、前方の水沼をソ連兵が馬で駆けつけてマンドリン自動銃を発射、先頭にいた暴民が倒れた。大きな声で何やらどなっていた。

そこへ伝令に行った中嶋さんが戻ってきて門を開いた。暴民はもう一人もいなかった。

遠くを見ると水溜りをはさんで向こうは種馬場に通じる警備道路、団家族は開かれた門を我れ先にと何も持たずここ王学孟村を立ち去った。その時私はどうしていたか記憶にないがもう馬以外にだれもいなかった。沢口団長と共に門を出ると、王老夫妻がだまって見

送っていて下さいました。ほんとうに心苦しく、迷惑をかけてしまったことを何とお詫びしてよいやら心が張り裂けるばかりであった。

この事態が発生する前日、団長と相談して団の金を五百円王老人に謝礼したのでした。(このころの金の価値として、日本の兵隊は食事の外、手当が五円か六円であった。)

畑のぬかるみを越えて、やっと農学校が見えてきた時のうれしかったこと。

後でわかったことでしたがあの時逃げ出した皆は軍用道路でソ連兵に整列させられ、現金、時計、万年筆、少しましな物を着ていた人ははぎ取られたとか。私たちは畑をまわり道したため、こんな目には会わなかった。

農学校に収容されて一か月くらい、ソ連軍の管理下で収容生活が始まった。林のある堤の方角の王学孟の方を眺めて、王老人たちの恩義を思い出して毎日手を合わせ、食糧、燃料、宿所の世話まで受けた六百人以上の人に代わって心から厚く感謝を申し上げ、後世に

いい伝えるものです。

【執筆者の横顔】

梶田繁氏は湧別村の尋常高等科を卒業して、当時道庁から湧別村が経済更生の指定村になったので、その経理事務を担当、三十歳まで一生懸命勤務していたところ、満州開拓団として北満に入植することを、団長からは非一緒に渡満して開拓団の経理会計担当者として勤務されたいと懇請された。

人は信頼されたら勇氣をもって応ずべきだと決意し、団長に快諾。

昭和十九年、妻と二歳になる息子と三人で勇躍渡満、満州の北安省海倫第十二次北海道実験開拓団に入植した。

しかし、翌二十年日本敗戦となつて、北満はソ連軍の悪逆無道の振舞いで地獄化した。

その年の十一月に三歳になる息子が栄養失調から病気にかかり死亡した。

繁氏はもちろん梶田夫人の悲痛きわまりない。

万難を克服してようやく郷里の湧別村に引き揚げた。生きて引揚げてきたもので北海道に、新たに開拓団をつくり、梶田氏も参加した。

病気をしたので十七年間働いて開拓はやめさせてもらった。

その後は王子造林会社からのまれて、造林の監督や習い覚えた造林技術士として、庭造りなどやって過ごした。

梶田氏は根っからの誠実一路で生きてゆく哲学をもっている人間なので、社会の人人から信頼される型の人。

息子は建築の仕事をして多忙であるが、開拓団では生きて引揚げた当時の少年たちが三人で「北満開拓碑」を建立して、大陸で死亡した同志の方方の諸霊を祭っている。

こうしたことを息子たちが実行したことは、親の梶田氏の誠意をもって社会に貢献している姿をみて育ったからであると痛切に感じた。梶田氏の健康で今後とも社会福祉にご精進を祈って止まない。